

# 北海道101総合アピール

北海道101総合アピール視点

北海道—その幻想の地図

資料 引用文

ロケハンレポート —

北海道101 年表

NO.

1

北海道101実行委員会

69から70に向けて、我々はいまここに集団撮影行動「北海道101」を提起する。それは、一分の身体をもった人間が見果てぬごとくつづく冷徹過酷な原野を前にし、又原野のように懐か親しい思いなど微塵に含まざる、横暴な国家権力に踏みにじられ、じゆうりんされながら、なおその中で生きている人間の歴史と向かいあわんとすることである。川さな身体に子供をおぶり、るんの子供をまわりにし、なお妊んでいる25、6歳の女は何の意志も持たず生きている。どの指も親指よりも太い手を持ち、日焼けした顔に深く太いしめをきざんだ男がいる。ゴードーという強い酒を飲んで明日の仕事に備えるアイヌの漁師がいる。大企業にすっかり組み込まれ、つつましやかに生きる多くの人間がいる。「東京以北最大の都市」を誇る札幌。そして、漁業の衝動路は、いまや一大コンビナートへの変望を返げようとしている。我々は、今原始社会の貧しきから、現代の管理社会の繁栄に至る広大な流れを同在させた北海道に向かうとき、一切の幻影と虚無を打ちくだき、いまの現実(=北海道)において具体的に存在する敵と対峙していくなかで、我々人間の課題に向って明確に構築していくことを誓う。我々の任務遂行は、正しく地を這うゲリラ活動であるだろう。

「北海道101」において、我々は文化の考え得る全ての、そして全く新しい方法論を駆使するだろう。表現方法、組織体勢、全国的展開方法全てにおいて……。

「北海道101」集団撮影行動隊の結成に向けて、全国の連盟、サークル員の主体的参加をここに呼びかけたい。



⑥ 鴻ノ舞

町といつよりも住友の会社。  
人間が土地の事を考えない。  
住友の中で、生活が安定した町。

⑦ イトムカ(水銀鉱山)

同鉱山縮山の責任者は「戦争でもあれば早く立ち直れるのだから」と語った。それは斜陽化のどん底を思わせる。  
ウソ口をひびき手があつた。労働者たちの表情も活気がなく、足どりも重い。顔は鉛毒の為、みんな青白く鉛色だつた。

⑧ 北見

日茶けた、綺麗で、ジーンと目。  
ビルが立ち並び、この地方の物質的な中心地。  
人間——これほどくだけた都会的。

⑨ 網走

町のどわやかさが刑務所をどうい感じにする。刑務所  
刑務所——赤いレンガの建物で、きれいな感じ。  
「網走番外地」上映禁止、歌わせない。  
若年——からの悪いのが多い。  
娘——町で一番きれいでいる。心が打んく。  
手洗いとかが陰鬱な感じしている所。  
わいらを送るとその家の前迄、道路が舗装される。  
ヤクザが金くさい町。(バス)  
秋に帰ると、殺しがある。短刀で——遠洋漁業の秘点。

⑩ 別海村

いと20日間食つて、そのあと離農した。  
離農したあとの土地を分けて、今は、食べる様に作ら  
す。平均400万円の借金  
パイロットファーム——10億の国費を投じた所——それから  
5年後、土地を開放した後、借金のために離農、日本一  
の自衛隊等の練習地。敷地の中を戦車が通る。

⑪ 根釧原野

「今、もう一度、根釧原野の空虚な広がりを感じて、何かから  
プロンティアの死をいふと、気持ちでいっけい。つまり日本の農  
家の零細化は、土地の多少や多少によるものでなく、その経営  
の構造と体質によるものであることを、このプロンティアの死  
はものがたっている。」

⑫ 和田村

和田兵史上、もっとも悲惨なところだ所。  
今は黙の前にかかっていた古い家が10軒ばかりあるだけ。

⑬ 根室 花咲

町中に、暴力を防止しようとする看板が多い。  
漁市場で働いている若い女の人——髪を高くゆい上げて  
をうる感じと働いている。夜はバーに勤める感じ。  
会社との間、バスで送り迎え  
雪の顔——さっし感じ、目が鋭い。  
バーが沢山あり、気軽に一ハイ飲める所が少ない。  
ビール1本 350~500円  
自分と船を持つている漁師、仕事が終わったらゴード酒  
4合飲み、八時に寝る、夜中の二時には仕事に出か  
街に遊ぶところは何もない。

⑭ 厚岸

近郊の周拓農民がでくさる感じ。遊ぶところも少なく、  
まじれた商店が国道沿いに並んでいる。

⑮ 釧路

街中、いたる所に土木工事。ほにり、ほく、異様なさ  
まじりかする。  
離農した人肉——土方、日雇に入る。  
北海道開発計画で大コンビナートに脱皮しようとする  
ヤクザが根をほっている(北海道——)  
へび女がピョッリする街  
表情一つ変えたいで、ベビを口から入れ鼻から出す。

⑯ 風連湖——漁業周拓

樺太 国後の漁民を戦後集めて村を作る。——外国  
の日本育ち。  
漁民アパートだけ残る。貸付金利息年一割。

①⑦ 帯広  
清潔な斗争  
白くきれいなALXット  
白いワイシャツに黒いズボン

①⑧ 新得  
25,6才の若い女が子供をおんぶしていた。その子供の目つきはうるんだ目で悲しそうな顔をしてこっちを見ていた。  
回りに5才を頭に3人の兄弟が染みない感じのしなやかな白なうすよこ糸の洋服をきてしゃかりに立っていた。  
彼らは肌にはつやがあるけれどもその彼女の体つきからは「私」とか「女」とかがみじんも感じられなかった。そして、また彼女は5ヶ月位の子供をはらんでいた。

①⑨ 青森内  
北の道で一番エードが飲まれている。

②⑩ 岩城  
ゆったりとした感じの一共同体  
行き場所のないことを感じる。  
山、麓、続出、すきま風がふく地帯。  
いためつけられた人間の重さ。  
またない！ 町中がゴミだらけ、川がまっくら  
子供が遊んでいるのをホーッと見つけるおばさん。  
命たく目がつりあがっている人間が多い  
女——悲しい顔をしている。やりたい事をしらないで生きてゆく。

②⑪ 苦小牧  
東の横にコカコーラのビンが2ターズ、階りにつけもの石が並んでいる。  
ソツがなくきれいな街。緑の公園ときれいな家。

②⑫ 室蘭  
赤茶けてゴミッホイ町 黒い町  
赤と白の煙が丘を越え、太平洋にたなびいてゆく。  
人間がつつましくほきて一生けんめいに働いている。  
〈労働強調〉 女——中途半端なうさぎ方。冒険——車を盗むこと。富士製鉄と日本製鋼の二大企業が丘をへたててド

カリと腰を居えている。

②⑬ 幌内  
馬が暴れて、車がまたと思ったら人間がいなくなった。  
囚人によって開かれた。

②⑭ 札幌  
空々しい清潔感=あふれた町。  
今も女しか目立たない  
東京以北最大の都会  
日本一タヤ←←←フヤケタ町。  
人間の頑張がなく、こまら町。  
斗争が絶つてなくて、回りをとりかこむ市民に何ものでも打ち居え得ない感じ。

# 資料

1947年7月13日、戦災者北海道集団帰農に応募しに  
200世帯約1000名のオニ次北農兵隊が上野駅から  
北海道へ向かった。敗戦一ヶ月前のことである。  
「北の朝月空 希望に明け、ゆくよ我等の開拓兵士  
拓く沃土に新生活の君に幸あれ栄あれ」歌に送られ  
「北農兵隊」再起の新天地へ向う。

現地の公会堂で帰農者受入地の現状から伝えられた。  
道庁からきたのは帰農者割当ての書類だけ。用意された  
開拓地や墾やされた土地はなし。農具も種子もきてはなし。  
と彼らは云うのだった。「みんな首はなし」と彼を取り  
囲む人々に対して「しかし土地は拓殖銀行が農家  
から差押えて荒地となったものならば、幾いこどもある。  
それを自分たちであたって作するなり買つたりして開墾  
するつもりならばいいだろう。ただし、そういう土地は何れ  
も百姓が夜逃げして捨てていたり暮せなかった  
土地だ。」と彼は云った。後に私たちが母の指導員  
になる馬車道組の言葉に「帰農者たちは耳を  
疑った。町長と警察署長は東京から、この土地にやってきて  
この土地にヤミをばびこすようなことは徹にっしんで  
もらいたし。違反者は断乎取締る」旨を強調した。

開する土地の目当ては皆目っかかった。私たちが部落  
のムト頼まれて牧草刈りや除草などでした。部落の労力は  
男が兵隊にとられて全く不足し枯渇していった。農業や中  
学校の学生が長期援農で来ていたが、東小部落に僅かに二  
人に過ぎなかった。帰農者のほとんどが全部が農事に未経験  
のため仕事はほかどうやら、しばらくすると頼みにくる人は少

なくあり、やがて敗戦を迎えた。八月十五日の夜、おとく  
まで私たちが恨みが出た。暗い中で「おれ」が  
まされたのだ。二んたを二つまでおまされて運れて二られ  
たんだ。帰して貰おうじやないか」と叫んだが誰か誰か  
おれだまったままだった。帰るに帰れない状態である。二  
ともこの頃にはもう誰も知らなかった。どうなる  
のだからかという不安と我々を棄てられたのだ。政府は東  
京では戦災難民化を防止するため美辞麗句でいつて連れ  
て来たということを知らないわけにはいかなかったのだ。  
一戦後北海道の開拓—— トキメキト「日本人」棄民おれ

開拓地は、拓殖銀行が農家から差押えて荒地とな  
った。それを自分たちであた  
って作するなり買つたりして  
開墾するつもりならばいい  
だろう。ただし、そういう土  
地は何れも百姓が夜逃げし  
て捨てていたり暮せなかつ  
た土地だ。後に私たちが母  
の指導員になる馬車道組の  
言葉に「帰農者たちは耳を  
疑った。町長と警察署長は  
東京から、この土地にやっ  
てきてこの土地にヤミをば  
びこすようなことは徹にっ  
しんでもらいたし。違反者  
は断乎取締る」旨を強調し  
た。

毎朝土曜日は氷がはり、それを割って中に入り足をまっかにしてくしゃくしゃと粘土をふんだ。火も天然ヤシタくも土地は火を吹いて、火を消す。まじになる木はなかった。10月24日の暮れ方、初雪になり、道に雪の中で木駄の縮を切らして裸足を歩いて帰ることもしはしはあった。そんな時、15才の少年である私は、当時ラジオがよく流していた「南から、南から/飛んできたきた渡り鳥/喜びに/悲しみに/富士のお山を眺めていた」という歌を大きな声を歌って歩いた。寒い林いからである。その歌「南から」のメロディーをきいたが、母はあめりやだ、という顔をする。をきくとする、というのである。北海道の自然は激しく冬に移り始め、ようやく牙をむきだしてきていた。川に壁は外壁だけしかぬれなかったから道踏をおおっていた。イナリは葉を落とし、雪の野がとこまでみえた。

農民たちは山へ行って木を伐り、運んだ。私はH家の人と共に馬車と薪材運ぶをするなかで、馬の使い方を覚えるまされた。西士別の長い峠を越え、いっぺんに建田を積み、馬を走らせた。見よう見まねに前の馬追いかか後の上に立てば立ち登れば座って重心をとって機が動かすのを防いだ。雪道は水がやすく下り坂では幾度も機をかえしては怒鳴られ、ようやく平坦地にさしかかると気がゆるみ、暗い中から起きて馬を山へ急がせる疲れで無性に腫くなる。ハッと気づくと機ごと雪の中に投げ出され後方で大人達が大笑いしている。居睡りして馬追うのをみつけて皆で手をかけて雪の中へ機ごと転がしたものである。

南拓生活は困難をツクけながらも徐々に安定に向っていた。水田化は進み、その水田に暗渠排水を施す。山から赤土を運んで泥炭土に客土した。冬の土地改良作業は苦しかったが造新山へ働きに行くよりは遙かに良い状態だった。南拓地 7年目の3月、姉は勤務する小学校のPTA会役員で部落の先士のすすめで隣村の中学教員と結婚した。半年でその結婚は失敗した。複雑な家庭事情のある家の子である彼は異常な性格の性不能者で、姉はいつみれば人身御供として送られたような気がした。私たちの一家の他は、村の人たちは姉の嫁いだ先方の事情や相手のことを皆か知っていたふうである。この結婚に最後まで反対しながら母に強行され、また失敗後の収拾を自分が全てしなければなら

うた。私と母との間にも相克がつのつていった。姉は結婚をめぐり問題は村の中での開拓者、帰農者たちに別けたらとでやほりあった。南拓農家には、嫁にくる人や嫁にやる親がいはいといふことである。農家の嫁不足が後にしつた社会問題のようになっていく。朝が出来るが南拓農家のこれは開拓始って以来今日まで続いている。姉の場合はそれの裏返しであった。青年期特有の人生的傾向にふつた。母もこの頃だった。もともと私の南拓生活の出発には母がいた。私は私と母との場合は、そのこと人間の複数をしたいという願いがあつた。私は父を知らず、子供の頃それと知らずあつた人は戦後間もなく死んでいった。しかし、私のその頃内は周囲の農民たちとみていると、ひとくせいに思えたりもした。例えば、父老夫妻の離農後、満州から引揚げて入植したYは、H家の主人公の甥であつたが、父に逃げられ母に捨てられこのH家へ育つたのであつた。私の南拓地の近くの誰彼にもそのよう者は多かつた。既我農のときは盲目の老母が膝を這いでYの家の周囲の畑で草取りをする姿がよくみうけた。当主の幼い日にその母に捨てられ、長じて小作農として自生したとき母が帰って来たのだといふことは母と母として扱われないようであつた。M兄弟の場合はこうである。夫に去られた母と娘の小作農に一人の男が婚養子に入つた。彼は母と娘に一人づつ男を産ませ、それを兄弟として育てた。母の方は流石な涙の目を送り盲目に落つたと言われ、その家族は一ツツ屋根の下に着せあつて暮らしていった。Yと私の南拓地は余り向いては、古い倒れかかつた家があつた。昭和初年の凶作、業恐慌期に農民は、その家の渠にナワを下げた首をくくつた。

北海道へ渡つた間もよく本明寺から分宿したY家には二人の子供があつたが、数年後にある夏祭にサーカスへ連れられたことがあつた。その子

ち母見あき疲れると、ゆり起二してもサーカス小屋の土肉の泥の上になてしまう。いつも親にフイテ鼻へ行き泣きながら親の後を追って構ってもらえず、遊び疲れたま疲れた鼻の上で老に頬や額をつけてねいつてしまふ日常習性となつてしまつてゐることに驚いたものだ。親たちほろれま不順と見いつつ馴れてしまつていた。疲れた母親の乳房正くわえを儘窒息死したり甚だしいのは棟つづきの畜舎から出た豚に、居間で眠つていた赤ん坊が噛み殺された。赤ん坊の上に猫かねて取調べられる中に発狂した農夫などゝいた。それらはみな忘れがたい強烈な印象と懐り正私に与えた。それ~~は~~してそのような話も随所にあつた。また農民からさかされ、知りされる戦前の川作時代よりも更にそれ以前の開拓初期の農民の状況は想像を絶することだつた。それには比べればお前たちは、と私たちは云われた。そして、私たちが帰農者と蔑視し甲斐性なし、東条君に何か出来るか俺達百姓ががって存めさせられた辛酸はお前たちに判るか、と白眼視する農民の多くも、内地府集の農村から追われ棄てられ逃し逃して来た者があり、その末裔であることを知らされたのである。

### ドキュメント日本人「開拓者の悲劇」

屯田制度の起りは寛政12年(1800年)に幕府がロシアに対す警備のため、当時千島で起つた蝦夷乱を契機に富強兵の途は宜しく屯田兵を設置するに如かずとし、勇松、臼糠に初住屯田させた。彼らは八王子同心で、風林火山からほろが南東平野をうかがう山岳武士の屯田勢の中心が

つたが扶持を与えられ、かつての主人の侵入を妨ぐために置かれたバリケードが、北方侵略に備えて初動したものである。彼ら武士が辺境の土地に住みつきその土地を耕して食糧を自給しながら警備するといふことは平時とはいつてもそれが4年で二とごとく冬の凍川に破れ、彼れらが勇松原野に残したものは30基にあまる甚むした墓石だけである。

オ二回の屯田は黒船来航に始まる。このとき再び幕府は北方警備にせまられ、奥羽各藩に警備を依頼する一方、借金のあふ貧乏士族、浪人、百姓、町人等をかき集め、七重村、室蘭、琴似に移住させた。しかし彼らは貧乏旗本や浪人共で農業経験者ではなく、「毛っぼら捕魚工業として」蠶繭として英日を送り」といふ事情であつた。徳川幕府は真意は何んであれ多くの人々は、賭博に氣をひかれ開拓には身が入らず、また冬場にさらわれて死んでびつた。幕臣の多くは維新の動亂に乗じて逃げ帰り、残つたのは僅か数産の態に過ぎぬ人々であつた。

三回目の移住は明治7年、明治政府の開拓による屯田制度である。当時、ロシアと千島、樺太を交換する直前であつたため、政府の軍隊は相手と利益を分けることになり万が一の場合以外の平時は警察的監責を行なうといふ屯田憲兵が募集する青森、宮城、酒田、水止族を~~地~~対象の士族を~~対象~~対象に集めたがほかには再募集には平民もその対象となつたほどである。募集成績の良かったのは青森県で、二二には戊辰の役で幕僚の汚名を着せられ、会津藩士達であつた。屯田兵の食事は米が足りないので、藜、カラクサ、イタトリの若芽など食える野草ならなんでも三はんに入れて量を抑えた。おやが化かできるようにすると上宮はおやがイモを強制的に食せさせ、飯には米いくらにイモいくら入れるといつて毎日飯の検査をして食わせた。朝はイモの塩煮、昼は塩

巾でのイモをすりつぶしたイモ餅、夜はフリキに釘で穴をあけておろし金で生イモをすったもの生えた団子で、イモイモイモでした。」と当時を古妻が語る。(根實)

結与品は食糧の他に武器に軍服、農具として鋤が二挺、マハカリ、鋸、山刀各一挺、砥石二個、ヤスリ一枚、鎌二丁と筵一枚。家具として鍋が二枚、釜一個、鉄瓶、ドンブツ、茶碗と皿、椀、米と米桶に手桶一荷から、ニヤシ桶までが支給され、夜具は大人が掛布団と敷布団一組、十四歳から七歳までが掛布団一枚。これらの官給品は、給与地や兵屋と共に時々検査があった。上は局長から大隊長、中隊長、小隊長と上から下まで、検査検査で追いまくられ、椀が一つ足りなくともひどく叱責を受けた。そんな場合には検査の終った家から、裏道を通って検査官の来る前に隣の家へ届けられ、また人目に立たない藪道を走って帰った。深い未開の藪道はそうして屯田兵たちの小さな秘密をかかすのに、大変有効なものであった。

朝起きて身支度をしツマゴ(わらグツ)をはいて家の中の雪をかたづけて、それから朝の火をたいた。焚火のあたたかさで煤についた雪がとけて、バタバタと煤水が背をぬらした。吹雪のない日は塞ぎのために夜中に家かほしけきょうにハンパンとなり、布団の上が真白に凍り、あたたかいご飯を食べていると茶鉢の先のちが草小屋に下り住めない自由村民がうらやましがられた。彼らは何んの保護もないもつと在辺のあたりで野嶺に近い生活に耐えなければならなかった。そうしたなかで屯田兵の囚人に対する態度は同情的であった。「二二に入ったときは料はまだちつでしたから、お婆さんと一緒に囚人のかぐカゴにのせてもらいました。カゴの底にガガガと笹の葉の敷いたる音がしましたから随分ひどい山の中だ」と思いました。その囚

人が直つけにきてあねちゃん煙草くれ煙草くれというものがから、煙草を紐につつんで落ちてくるの捨うならいいでしょう。ニヤもやっただでなく落したんですからね。するとね、それま口の中に入れてかむんですよ。そして手と合わせてしまいいした。下には下があるものだと思います。」(琴似)

私のと二三年の新兵だね。山形の館岡から御殿というところから最上川を舟でくだって、酒田でも随分とまって、本直さんのお祭あったでにキヤカで、皆遊んでいたり火事だ火事だって火事だれして、皆集まった、汽船が入ったからのらんければならんというので、その時は物凄かった。それで船にのったでしょう。そして客船でなくて、荷物船でしょう。その段々の棚のついたところせつと二まれて、そしてアキ臭いというんだが何だか、そして上で小便したのが漏ってくるしさ、そして四日四晩かかって細走のかげ(ホニモイ)さあがって、山越えて西へ出たの。そして荷物小屋にとめてもらってね。次の日晴いうちたって、細走翔舟できて、一号の駅通にあがったらホツホツ雨が降ってね。そ二ワラジはいて、ヤチャヤチャ歩いて来たの。だから忘れられな。私が牛大になつて後が辛くて四つの子供お預けてね、母親が子供できるようになって歩かれないうで馬車をつれてきてもらったの。私たちね内地でるとき、田中の妹がうちの兄さんに嫁に来て、私が田中に来てやりとりしたの、式は内地でしたか、本当にやりとりしたのは来た次の年の春だったの。

私の兄弟采山いて八人家族だったか、こまったから、あたり前に米もろの産主と嫁さんと、父親と母親と私だけ、だから東家ではこまったよ。それに九月に来たんだから、何もくれないうでしょう。家もひどい家さ、台しなれば入れない上台の高

川家。入ったら中に木生えてゐるんだもの、おさなあと鬼  
つたね。

それに私嫁になつたって身体小さいし年はゆかんし、かはな  
いし、どんだけ恥しい鬼しいたが、泣いて泣いて子供かできる  
まで泣いたね。身体は小さいでしようかは弱いでしよう。それ  
でも嫁でしよう。あれで嫁さんかといわれるの恥しくて、かせ  
いで休むとき川さ木のみに行きついで、川の中へ顔つ、二ん  
で何泣いたが、そして顔洗つて来てやったもんだ。

それでつらから時々実家に行くの。うちに行くといいわ。  
それで帰るの一分でものがすべと鬼つて---帰るとき東相内の  
坂のとこ、アソアソて大声をあげて泣いて帰って来たんだ。  
そして叢のかけからヒョコヒョコッと女衆が顔出したので、  
びくりにしてやめてしまったの。今だから笑うんぞとアハハ---

本当に子供でできるまで死んでもいいと思つた。風呂が四  
比にあつたがよるねる前に風呂へ行って帰り、神社の前通るの  
で塞銭あげて手合したもんだ。子供でまたら心おちついて、  
二つたら二つとしていれないと思つたね。私の姉さんはあとの  
ない人(荒地鬼でなく人)なども、何でもがりがりいう人だべさ、  
つらかつたよ。家へ帰れば実家の母親は「それほどつらかつた  
らお前何とかせといいたいが、うちへだけは来てくれんなよ、  
うちには子供多いし、こつして嫁さんに頼倒れしてもらなけれ  
ばならぬしあるから---」とこのうから泣くまじなべさ。や  
つたわ、とつたりだも、私帰つたら嫁さんいれなくなるべしね  
。私も嫁さん小さいときから奉公した人だから、お互苦勞し  
たんだ。

ハツカ作つたときもつらかつたね。雨が降つたら縄は。天気  
いいと夜半過ぎまでハツカかけ。帰りいつても夜半過ぎだから、  
心がおちついて歩いてゐるんだ。だから足がテックラテックラ

つてして目あけて、帰つて風呂は五時になつてお天直さまがあ  
がつても、おさないけれども。昔朝仕事しない朝飯食いた二  
となかつたよ。

私の家~~実家~~は内地で大工だつたの。百性なんて知らなかつ  
たが、北海道へ行つたら絶対大工しないといつていたが、兵庫  
がどののてたのまれて随分家なおしたね。舅爺さんは木を倒  
すとそこら一杯になるので、木にのびつて枝おろすの。それで  
何度も死ぬ目した。堤防にあつた大きな桂の枝おろしたときも  
、綱で木がらおりて来たら、綱が木の枝にひっかかち中崩らり  
んになつてしまつて、今はなせば下はおとした枝が櫓みたいにな  
つてゐるべき。それで皆がハシゴつたないでもとどがなしいし、  
大騒動になり婆さん神様をおあかしあげてたのをおべさ、どう  
も仕様なくて鬼いまってとびおちて、それでハシゴと木の間に  
おちて助かつたの。二七号でも枝おろしてつて落ちて馬車  
に束せられて来て---器な仕事の上手な人だつた。苦勞した  
人なんだから、二まつてゐる人をどれだけ泊めたかしらない人  
だつた。昔汽車も馬もないとき旭川へ行くのに、歩くまじな  
べしよう。その人達が毎晩うちへ泊つたね。だからおがすつ  
くるとき余方につくつておがなければなんなかつた。自分の  
こころで子供も多いの、ちゃんとか客あつたかして警察から  
食までとめたよ。道路人車や鉄道のタコもかくして人に見られ  
ないようにして、板車で送つてやつたりしてね。

私は悲しいときは念仏をうたにして、草取りでも何でもうた  
いましたよ。歌なんてうたえなかつたね。かせおがらうらくてね  
。ナマとダブツ、ナマとダブツ、ナマとダブツ。

日露戦争のときは子供一人、腹の中へ一人おいて行つたの。  
金の心配だけは舅さんしてくれただからよかつたが。---何だつ  
て仕事に苦勞したんだ。もうその頃は扶助米もなつてしまつた。  
それに米はとれなしいし、路とがうルイ(夕チキホウ)とかと  
つて来て、飯に入れました。味噌がなくてゴシヨイも煮てついで  
して塩入れて、それでみるのがあり。その塩だつて綱走まで行  
かないと買われなしいし、買物には馬で夜通しかけて出かけたも  
のであつたよ。うんまじもの食わなかつたから病氣も一つもな  
かつたね。

田中ヨリ盤談(明治十六年生北田兵妻女)

凡 世 道 入 分 け あり

仁右衛門は自分の耕した畑の灰を一わたり煮足すうに見やっ  
て小屋に帰った。手ばしにく鉄を洗馬糞を作った。そして鉢巻  
の下にヒビんだ汗を袖口で拭いて炊事にかかった妻に先刻の五十  
錢銀貨を求めた。妻はそれをおたす手づかには二三度横面をなくら  
れおぼたならなかった。仁右衛門はやがてふらりと小屋を出た。妻  
はひとりで淋しく夕食を食った。仁右衛門は一片の銀貨を腹掛け  
の帯に入れてみたり出してみたり親指で空に弾き上げたりしなが  
ら市街地の方に出かけうたった。

九時——九時といふは農場では夜ふけだ。——を過ぎつから  
仁右衛門はいい酒気嫌で突然佐藤の戸口に現われた。佐藤の妻も  
晩酌に酔ひしれつた。幸十と鼎座になつて三人は囲炉裡を囲ん  
でまた飲みながら打ち解けた馬鹿話をした。仁右衛門が自分の小  
屋に着いた時は十一時を過ぎつた。妻は燃えかする囲炉裡で  
火を背まふけて、線のはみ出た薪を柏に着てぐすり燻いで言  
ひた。仁右衛門は悪戯者らしくよくけながり近寄り、わと言  
つて乗りかかると妻を抱きすくめた。驚いて眼を覚ました妻  
が抱き上げようとする。仁右衛門はさえきりとめて妻を横抱き  
に抱きすくめてしまつた。

「さうね、まん下用べ焼けるか。二、三の可愛がられても肝で焼ける  
か。可愛い物やい、泣きは。見おに今にた俺ら、汝に緋の衣を着  
せて二すぞ。帳場の和郎し、彼は折きわす、唾を吐いたが寝るべ  
く暇に俺ら親方と膝つきあわして話してみせるかな。白痴め。俺  
ら加三と誰知るもんぞ、汝や可愛いぞ。心から可愛いぞ。よし、よ  
し。汝や二枚嫌いなが、折木と色んな大櫃を取り出してその一つを  
とちやぐちやに押しつけて、息のつまるほど妻の口にあつた。  
（「カインの末裔」有島武郎）

「痛い」それが聞きたか、Eの下。彼の肉体は一度に油をアアお  
かけられて、アア立っ血の気おに眼がくろめられた。彼小りき  
なり女に飛びかかつて、折きわす、殴つたり足蹴にしたりした。  
女は痛いと一言い続けながらも彼たからまらつた。そして喘みつ  
いた。彼はとうとう女を抱きすくめて道路に出た。女は彼の顔に  
鋭く延びた爪をたてて逃れようとした。二人は二かみ合つたお  
うと組み合つて倒れた。倒れながら争つた。彼はとうとう女を  
り蹴した。はね起きて逃りにかかると、一目散に逃げたと鬼

女は、反対に抱きつりてきた。二人は互に情に堪えかねてまた  
段つたり引つ掻いたりした。彼は女のたぶさで掴んで道の上を  
ずるずる引つ張つて行った。集会所に来た時は二人とも傷だら  
けになつて、ぶるぶる震えながら床の上におぼたれてゐた。彼  
は門の中に突っ立ちながらうしろを興奮のためによろめいた

「童子連(わらじ)は何条(なじり)という他人(ひと)の畑を踏み  
込んだ。百姓の銭鬼(ぜにおに)に畑のう大事(だいじ)がる道(みち)知(し)んおえだ。平(へい)う  
に王(おう)立ち(たち)に存(ぞん)つてにらみおえながら彼(かれ)ほどなつた。子供(こども)たち(たち)は  
もつたか、いさるうに泣(な)きたしおからあつた仁右衛門(にえもん)の竹(たけ)と歩(あ)り  
つて来た。待(まち)ちかまえた仁右衛門(にえもん)の鉢(はち)巻(まき)は十二(じふに)ほどに  
なる女(め)の瘦(す)れた頬(ほ)が、おぼたれてたきつた。三人(さんにん)の子(こ)供(ども)  
は一度(いちど)に席(せき)を感(かん)じたように声(こゑ)を揚(あ)げてわめきだした。仁右衛  
門(にえもん)は長(なが)幼(ごう)の容(よう)赦(じ)なく手(て)あまら第(だい)に段(だん)りつた。

やがて仁右衛門は何を思ひ出したのか、のろのろと小屋の中  
にならつてゐた。妻は眼に角をたてて首だけ後に廻して洞穴  
のような小屋の入口を見返つた。しばらくすると仁右衛門は赤  
坊正背負つて、一挺の鉄を右手に提げて小屋から出て来た。つ  
つりて来ようとするういつて彼はすたすたと道の方に出て行つた。  
簡単な啼き声で動物と動物とかが互に理解し合うように、妻は  
仁右衛門のしようとする事が呑み込められ、のろろと立  
ち上がつてその後を随つた。そしてめろめろと泣き続けつた

夫婦が行き着いたのは国道五十町も俱知安の方に来た左牛の  
岡の上にある村の共同墓地だつた。その上からは松川農場を  
一面に見渡して、ルベコベ、ニセコアンの連山も川向の昆布  
殖む身に取りようだつた。夏の夜の透明な空は青みわたつて  
、月の光が隣のようにあつての光るものの上におぼたつた。蚊  
の群れがわんわんとうなつて二人に襲りかかつた。  
仁右衛門は死体を背負つたまま、小さな墓標や石塔の立ち列  
なつた岡の空地に穴を掘りだした。鉄の土を食ひ込め音だけか  
景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだま  
でとまどき顔に来る蚊をたたき殺しながらかつた。三天ほ

どの穴を掘り終ると仁右衛門は鉄の牛を休めて顔の汗を手の甲で押し拭いた。夏の夜は静かだった。その時突然恐しい考えが彼の吐胸を突いて浮かんだ。彼はマの考えに自分ながら驚いた。ふいにあきれて眼を見張っていたが、やがて大声を立てて頑童のゴトく泣きおめき始めた。その声は醜くものすごかった。妻はきょとんとんとして、顔じゆうを涙にしながら恐ろしげに夫を見守った。「笠井の四圍猿めが、嬰子ニと殺したぞ。殺したぞ」彼は醜い泣き声の中からうめく。

それから仁右衛門の言うままに妻は小屋の中をかたづけ始めた。背負えるだけは雑穀も荷造りして大小二つの荷が出た。妻は夫の心持ちがわかると、また長い苦しい漂流の生活を思いやっ、おろおろと泣きかきながら、夫の荒立った気分を恐れ、涙を飲みみしみした。仁右衛門は小屋の奥の奥に突立って障から障まで目測でもするように見まわした。二人は黙ったままうまごまけした。妻が風呂敷を被って荷を背負うと、仁右衛門は後から助け起しつやうした。妻はとうとう身を震わして泣き出した。意外にも仁右衛門は叱りつけなかった。そして自分は大まかな荷を軽々と背負い上げてその上に馬の皮を乗せた。二人は言ひ合わせたようにもう一度小屋を見廻した。

有島武郎著 「カインの末裔」より

「折から降り来る粉々たる雪を、ああ良しい眺望じゃと水晶を欺むと硝子窓越しに見て喜ぶ気楽な儼然役を取り當つた。それに引きかえて運わるく生まれた者は向の罪作ろうでもなく、昨日産聲揚げたばかりになつた、破れ片浅る寒気を受けて命脆く、乳の味もよくは覚えぬ間に終る嬰児の様に語らぬ目に逢う事あり。貧と富と長寿と天死と発露と戒と強弱と力のぶからなる世の裏表は無くて叶はぬ定めなればよくあきらむべきとながらさあきりめはつかぬものなり。語らうが蝦夷のふかし、語らば恨みに聲も立たぬなるべし、書らうが其恨み、書かば悲しみは筆も凍るべし、リで書き流さん墨の痕、濃かれ薄かれ我筆凍るまで」

幸田露伴著 「雪粉々」より

幸田露伴 「雪粉々」について

武力による威嚇や欺瞞的和睦による懐柔政策、これがアイヌに対する日本人の姿勢だった。窮鼠正か志の一角即死状態がついにアイヌの不安と不満を爆発させた大動乱こそ世にリウリャクシャインの乱であり、この悲劇を材として仕組まれたもの。

— ∞ —

士籍を剥かれた家臣760余名は数千の家族とともに一挙に土民となされ、路傍に投げ出された。非難と怨嗟ととのえる余地も置かせない処分であった。そこで思いは蝦夷地に走ったのだ。

死力を尽くして開拓つかまつるべし……何分にも自費もつて千万倍 死力を尽くし……前罪の百分一にても相償い申したく

本庄睦男著 「石狩川」より

「石狩川」について

藩主伊達邦夷は一万五千石からただの六十五石に減俸されお家断絶はまぬがれたものの、米一粒せえ屑肉の肉で奪い合わねばならぬ事態になりかねなかった。家老の阿賀喜謙は藩士に計り、新たに死ぬべき場所を定め、北海道新住を断行した。明治四年三月だった。第一次開拓集田が不毛の新天地を開墾の鉄まぶるえる様才=次初民募集にいたるまでの間の出来事を描いたもの。

「百姓記」(吉日十四雄著)について

十勝農業開拓の山本源三一家をあって書いておりさんはんどの目に合つてき、我身大事ということをオーと考え、成功するしかないとこのことにかけてゆく。妻はやましく、弟は正義感にあふれてくる人間。この一家の各々の死に至る迄書き続ける。

「土と人」(早川三代治)に於いて  
 農業経済学者の皮徹しを以てついに観察した根釧原野の連綿的恐慌に取材し「死の原野」に記し上げられた目もあてられぬ農民の惨状を揺らした。

「養生木」(徳富蘇花)に於いて  
 明治41年当時の軍国主義に入つていこうとした時代に失恋し、職を捨て、病をえ、ついに自殺する——「恋人の名を呼ぶ」自らの手で28才の数奇の生涯を終えた。その著者ノートをもとに書かれたもので北海道がかなりのウエイトを占めてゐる。

—北海道資料—

〈アイヌ虐待〉  
 アイヌには全く救済の道がなかった。せつぱつとて反乱を起したのだから、それは鉄砲によつて鎮圧された。寛文の乱の時は奥地にまで強硬な豪族が残り、松前藩と一戦するにともなはれた。この時、松前藩の乱で、アイヌは完全に屈服した。アイヌとしては最後の反抗であり、以後は暴虐な仕打ちを受けるも、もはや起す気力が失はれ、奴隷への段階へ墮落していった。後松前藩時代のわが国が三十二年間に、アイヌの生活はほとんどじめじめなものになつていった。この時代の請負人はもはやアイヌの生命を握る絶対権力の者であり、これに服従せぬ限り生活の質はなかつた。その漁業規模はますます拡大され、労働が強化されてゆく反面、その収入は極めて少なかった。それよりも恐ろしかったのは、離島への強制出稼であり、出稼でアイヌの取扱いは非常に悪く、二の三の行動は暴虐の極みで、別な漁場で働かせたり、墮胎薬を飲ませ、男は昼夜の別なく働かせ、そのため病気がなれば堀立小屋へ押しこめて食事も与えなかつた。こうして、働かなくなるまで、ニキを使うので、20年間も郷里へ帰されなかつた。それでアイヌは、後島をアヲタコタ(地獄)といひ、それらへ送られることと非常に恐れた。そればかりでなく、労働力

不足すると山の中に住んでゐるアイヌにまで、アイヌ狩りと称する事を行つた。こうしてアイヌの人口は後松前藩時代の30年間に著るしく減少を示す。  
 (網走小史より)

〈囚人の強制労働〉  
 戸集監、月形潔の発案によつて囚人は道路や炭坑労働にせられた。彼らは回りの工場の荒廃を免れ、其苦役に堪え、死するも「彼ら」の老いへの堪えが、死して其苦役を減らすは監獄支出の困難を告ぐる今日に於いて止むを得ざる政略なり。幌内炭鉱で600~1100名前後を雇用し、釧路跡佐登硫黄鉱山では10年契約で硫黄の採掘、精錬に使用する。幌内ではマラリア、跡佐登には水腫、脚気が流行し、悲惨をきわめた。1887年、岩見沢・滝川間の工事にあたり安岡樺戸典獄が囚人使用を提議し、道庁の見積り二万圓の二万圓を2081円49銭で低上げたのにはじまり、囚人開きく道路の延長は181里以上に達し、例で、この時、北見方面から入った釧路監獄の囚徒800人余り、予定路線に分散され二里~二里半を一区画とし、各囚徒に泊所を設け200余人を分配し、休泊所間の二里余りは両方が起工し、必ず中夫で成功するにとし、したがつてきれば次に転送するのであつて、休泊所を設けること、乃て国境に達し、40里余りの未開地の道路開きくまわすか半年で完成せしめた。過度の労働のため多数の逃亡者を出し、また飲料水欠乏と降雨の運送のため一種の水腫を發し、日々数名の新患者を生じた。死者の配置は少く、夏期数ヶ月間に百人以上の死者を出し、逃亡者の中には拒捕斬殺されたものもあつた。しかし、政府の指導は、91年出版の「日本開闢」93年長官、北海道道などには、囚人便役を是認し、奨励してゐた。

奥山亮著「北海道史概説」刊

〈炭鉱暴動〉  
 炭鉱には封建的労働組織が強力に支配してゐるうえに炭坑会社は、炭坑の労働者に、その会社が三層階、炭坑の良の物になつて1910年頃には経営全くゆきまを有様であつた。たのであるから、労働条件に向上するはずはなく、かえつて大災害の頻発とな



ロケ班個人レポート

その1

明治初頭、人間の住む村落は僅に道南の最端部に点在するだけで、一歩でも奥地へ分け入れば熊笹と原始林が生い茂り、熊がその中をわがその顔に歩き回っていた北海道は今訪れる者にその当時の面影を忍ばせることなく、加担するならば物質的繁栄の幻想をあり余るだけ与えるあの支配体制の中に正確なまぐら組まれている。

今回のロケハンで私達は去年の夏キャラバン隊で回った時よりもはるかに多くの家が原野に建ち並んでいるのを眼のあたりなく、はるかに都会的に守った人々に接する中で、それを確認する事が出来た。存ん多くの人達と私達は今生活が楽である事と将来の夢を語ってくれた事もある。彼らはやっとなくなった生活と完備した身の回りに一掃にホッとしたところであった。だが相手の熱い口調が語らば語る程私達自身はみだくなにならざるを得なかった。

いよいよ物質的繁栄という霧をかぶった化物は、かつて如何様に人間の手に忍び込み、この先どこまでその内部を食い荒してやれば気が済むのだろうか。

6月14日、昼少し前津軽海峡を渡って函館に着く。ホームの木の上よりとした冷たさが北海道に来た実感を与える。午後函館を差って釧路へ向う。気のせいだが列車のスピードが本州に比べグッと落ちたようだ。「まだ単線区間が多く通過する際が多くで通過待ちの列車とすれ違う。煙をモクモクはき出す機関車から降りた運転士と助手が日陰に煙を降ろしている。凍んだ空と雄大な雲。山の稜線と木の種類をすべて青森までと違ふ。海沿いに、あるいは水田の中に点在する家の中には極立小屋同然のものを垣子を見る。北海道を渡る事を

単に食してまで至るを告発する事としては存らないと思う。

函館を去る途中二島向ふ。それまでの荒涼とした沿線の風景が、列車が曲を回った途端にガラリと変わる。北海道最大の工業都市が河の兆候をなしに、突然立ち現われるのだ。港内にひしめきあって停泊する幾万トンの貨物船。緑色にくっきりと赤いマークを印した巨大な石油タンクの群れ。煙突を模たえたようなセメント工場のクリニカー。向と大島が遠くから見えてくるのだから。心なして街に降り立ってみるととりとえ難くなくなったようだ。

翌日、イタニキの丘の上からこの町を見降した時、それはそれと強烈な印象となって眼に焼きついた。街の中央にドッカーリ腰を据えている富士製鉄と日本製鋼の二大企業の本拠地。そこより絶えず吐き出される様々な色の煙。街を覆ったくす煙の出所はここだったのだ。風のない日には煙は周囲を丘に囲まれたこの街の上空に佇ぶが、今日のような風のある日は丘を越えて太平洋に流れるのだ。紺碧の海の彼方、空と海の境さかいつがなくなる方へ赤い煙はじんじんと流れて行った。

鳥の口吻のように鉤状に曲って海に突き出たこの町はほとんどが丘陵地帯で、市街地の大半を占める工場群は埋立地に建っている。それを囲むように建ち並ぶそれぞれの会社の倉庫、社宅、社用車、その他の施設。繁華街や住宅街、学校等はこれらと全く別の建たされたものだ。また、新築される家は丘の上へ上へと登って来、中には頂上の海からの風をまとりに受ける個所に建てたものもある。この街で会社の建物は、平均して一番新しいものばかりに建て替えるという話。

街へ降りて行って、建物の色が一律に赤茶色しているのが気がつく。屋根も壁も扉も、こここに立つ看板も、鉄の錆びが成ったみたいだ。長い年月工場から吐き出された、空から降下した煤煙の為だ。

街の中央に工場が腰を据えている事でも、北海道開発の最重点地区に指定されている事でも同じで、空から50キロ程道央にある苫小牧に行くと様子が全く違うのに驚く。まずきれいな街並。はるかに近代的な構構。ショーウィンドーは都会的なモードが陳列されていて、人々の言葉にも余りがない。王子製紙の社宅街も道路からゆったりと直線とリ余地を基生で埋めた中にある。建ち並ぶ一・五階建のアパート。各家庭に湯湯を工場から供給する銀色のパイプが街中くまなく張りめぐらされている。公園が目立ち、スーパーマーケットやキャブテリアが何軒もよく整頓されている。工場から吐き出される煙も真白で向かう所まで清潔だ。

街を歩いて受ける感じが以上の二つの都市で違うよりの、そこに住んでいる人々も又違った生活を送っているようだった。苫小牧の方が空気がより一風澄々で良く物質も多くて暮らしやすいように思える。去年の夏の三点合宿で空蘭工業大学のある学生は空蘭の町が清潔なところだと言いつまらないうちの切った事思い出す。しかし、きれいな市街地、娯楽場その他諸々の施設の整備された都市とはいったいどんな意味を持つのだろうか。

そこで生活する事が今人間的として幸福な事なのだろうか。僕は札幌や苫小牧のように完備された都会へ行けば向の自由も無く迷ったり物思いにふけったり出来るんだという思考から、今それを実は何一つとして自由な事をしていない事

にはならぬのせとこの思いに変わりつつある。

北海道は広い。今度の10月1日、北海道でもと北の北の街や村で、人々はそれを北果った生活態度で生きているのを知った。しかし共通して見えるのは、少くも人々、でも誰れもが悲しそうにうらんだ眼を持ち、してはもれかえめに振まうことだ。

王子製紙の工場に僕に見学案内をしてくれた老人。彼は大正の初期に秋田からこの街に移り、定年後にこうして委託されて案内を勤めていると語った。彼は自分が王子の人である事が自慢でしかたないようだった。それから札幌から函館へ向う夜通りの車で行く話しかけてくれた伯父さん。彼は釧路まで通った。北十年以上も道沿り建物を転々と渡り歩いた。久しぶりの休暇で札幌の弟の家を訪ねて帰り、金庫も空けて居眠りを始めた彼の頭上、組網には汚れた風が敷くくまされて一台のホームレスが置かれていた。そして注ぎの町で崩れた土倉を撮っていると、下りと集まってきた小学生たち。他の町では方角を向ける子供にも顔をむけられたのに、ここではそれが意外であった。その中一人は、今お金を持っているかと尋ね、やてくれと云った。

今日と空蘭の街の煤煙に覆われているだろうか。苫小牧の街は相変らず優雅に佇んでいるのかも知れない。人々の生活にも向きの束縛もなりよつに見えるかも知れない。だが昨日より今日も明日へと着実に推し進められていくのは、巨大な管理社会の手に彼ら一人一人が繰り込まれてしまっているのではないだろうか。現在利権がはつきりと見極めねばならない国家が、最も極端に力様木を露呈している北海道。北海道101という集団撮影に参加す。中々難しは人間の側から作りあげていくべき世界ビジョンを志向しようと思っている。

個人レポート

その2

大正の初期の維新—自らを荷物に仕立て、空航しようとしたりする様に、樺太への夢が熱気になされたように、日本中にまんえんした時代。この所は渡航の為に賑った。まるで明治期の北海道開拓の夢を抱いて津軽の海を見たのと同じように、あの低くたれ込めた雲の色と連続したオホーツクの海を臨んだであろう。

明治以前からの体制側がこの地を北方警備の要所と固めて直轄の地点たる人間が何を求めて立つところに来てたのではあった。しかしそれはこの地の持つ性格の本質的にわかってたのではなかった。

今ノサップ岬の先端にある米基地の白いアンテナ保護ドーム群が、みすんで背景の緑たおい込まれてゆきそう。この基地は大きさを構設は見えないが内部に持つ性格の鋭さは、他の地点は及ばない。

そこで生活する人間にとってこの侵略の拠点であるということ、生活を作り立てることを助けるものとして考え、自らの生活を侵すものとしてほとらえられてゆかない。ユニオ採りのおばさんは、基地の青を見て、「土地とろれちあつたべ」と言いながら、又息子も基地でアルバイトして、いることをたのもしげにいう。

しかし、市内の方へ行くとも市民憲章がきれいな造りの家のそばに貼られ、本屋に学生録簿が書棚の端近くを占める。そしてバーやキャバレー等が早くも5階建てぐらいのタイル張りの中にきれいに収められ始めた。バーやキャバレーの様な建ち並ぶ、人間がその中で自らと対決する事を決定的に消費させてしまおうとするのである。そして街を歩く米人、又「女」達はこの街の中にあつては街角から街角へ吸い込まれていく様に思えて来る。バー、キャバレー等はその中の動き

その中の動きが外へ溢れて来る事もない。そして若い自衛隊員が、この様な店を前にして、入る事をためらいつつふつと入つてしまふ。この様に、体つきりと街自体に不透明なベールが、おおわれて来つつある中で、人間の中に体この動きに対して自らが体つきりと対決してゆくこと体なくなつてしまふ。「業」みたいなきのたをそれを行つていつてしまふ。

この漁港を漁港として盛に出したのには、北洋(樺太沖)への漁が始つてからである。それまでは荷物の出入れを中心に行い、漁業は漁船でのみ行われていた。そして今、この北洋の獲物の価値は、買う側は日魯、(日)等の大企業、その傘下の企業への入札によるのみ決定されていつてしまふのである。しかし、この地では不安定なボラを時によき寒の季の季取りが60~70万位に存る(一度の出漁で)高い収入の仕事である。しかし、それははっきりと企業側と譲着した漁船の中でしかそれは存在してゆかないのである。

社文へ行く船着場の舟へ行く、一番舟頭だ。トンネルをたまたに半分に分けた様な半円状の防波堤が見えて来る。かつて樺太行の人間でござつた返り、漁業でござつた返り、今は樺太のようた、その黒い姿をさらす。先端から石の柱がガーニとおろされて、いる。漁船がたつたらしい建物が、ガヤガヤに壊れている。ヒンクさうす緑、波をよけるドームに比すると反片にすつからかんとしている。あの黒いドーム—樺太とはいいいがたく今の何処として、目の前に立ちすくむ。

社文へ戻る。船をおりると目の前に一部屋位の大ささがある。う観光案内板がくすんだ色面をさらし立つ。冷凍工場で働くおばさん達がまぶしそうな目をして船から降りる観光客を見る。「お

の島—社文」このキャッチフレーズのもとに大量に送り込まれて来る観光客しかし樹木の無いこの島には、あの明治後期の大山小島がなつた、十世

の老人は、「昔は家をたてるので、何でも山から木を切りだしたもんだ。」と残念そうに1111 役場の若い職員は、「今は植林事業を全島で起=して1111ます。数年後をみて1111下さい。」と頼もしげに話す。

この島は漁業が一番就業人口の多い産業である。しかし、これも開拓期には宗谷へ入植した平民屯田兵が、僅かに冬で大半がその地を去った。しかし、その中の六人がこの島に目をつけてニニに渡り、漁業を主に始める。しかし、松前藩の昔からアイヌを強制労働につかせ、漁を行ったのであった。島と外との交易は全く謂ゆるアイヌ取引であった。そして、収奪の物凄く行なわれたのであった。

今ニニで取れるものはほとんど、島内で消化されてしまうのであり、島外へ送られるものは漁組を通してのみ売買が可能なのである。老漁夫は言う。「組合の役員なんかは工場なんかで借金をどんどん作ってしまうけれど、その借金を払うのは俺たちだ。もう二千万にもなった心。とがでる事は若い奴のこと考えるとできぬし……… 出稼ぎに東京なんかに行っても、組合から帰って来いと言われると、帰らなわけにもりかなりだ。出稼ぎで、金かせいだ方が、ニニで漁するよりもずっともうかるんだ。

礼文の島の集落は、内地の立ち方としても似ていて、上からゴツゴツと作られたという感じではなく、人面が在みつくことによつて何にかが形成されていった感じがする。船泊の町から波止場の方へ行くと、ものすごくきたない冷凍工場がある。漁干場なんかは出人口がムシ口でできて1111る。黒い建物の中で、黄色のムシ口が目立つ。工場造は、ほそ道路が1111るが、ニニでばったりと途切れ、ニニから家と家と

の間に踏み分けられた感じの道が延びる。その右側には白く塗られたたかいた家壁が連なり、その前にはすぐ網小屋、便所、干漁場などが続く。足元にはハエナワの縄が丸く干してある。それをよけながら歩いてゆく。家の中にはテレビの青色と真白の洗濯物が暗い家の中にパツと目に入る。人の気配がほとんどしな1111。干漁を重なる小屋があり、その中は臭くくらで、ちよつと目には何をしているのか分らな1111。その前を歩きたか覗くとクシとこちらを見る。目が合うとフツと足むけ手を動かす。船が碇の上に乗っている。それは長く上っているらしく、それをたつぎ道——以前の道と今はその入先をぐるりと回って道が続く。使用して1111る船付場があり、そこをぶつんと切れ草が生えた平らな所に出る。そして、ニニに白くポツツとして網小屋が立っている。

### 個人レポート

その3

明治二十三年旭川網走を結ぶ中央道路開さくの爲の囚人を収容するために造られた集治監を前身とする網走刑務所は町のはずれに山と川にはさまれている。北海道開拓の初期には鉱山の開拓や土木工事など死を伴う危険な工事の労働力として囚人ならうってつけだし、たまたま死んでも経費がそれ分だけ減って一挙両得だと言言葉のもとに多くの囚人が投入されたが明治二十四年二月工事もおおむらひで完成するという猛スピードで、使われた囚人四千のうち四百人の死者を残して完成した。囚人は開拓のための消耗品でしかなかったのである。この網走刑務所はしかし、そのきびみ込まれた工場と内部の壁を少しも感じさせないきれいな赤レンガの壁で身を守っている。余りにきれいなせいで西洋月と二の戒を思わせる内前の前に観光客がタクシーで乗りつける。この塔

ハンな服装を赤レンガ壁に映えさせて笑っているから記念写真を撮る。そして観光客のルールに従って中を見ようなどと思わずタクトレ一が帰って行く。きれいさの中に若しやを感じて正内から回って山に登ろうとする。立入禁止の札とさくにあっかつてしまった。我々に見せているのはあくまでもきれいな入りなのだ。そして今でもその内部に突き抜けようとする者は用意周到に準備されたガクにはさまれ、入りのあざやかなに包もうとする。そのきれいさは更にどんな意味をばらんでいくのか。網走の街を一番くして見るのは看守の娘だという。あのきれいな入りは吸いこまれていく看守の生活の中でのその娘の心はすさんでいく。刑務所の入りはその心のすさまじさを陰翳して続いている。そのキツとした美しさの中にすこさを秘めて。網走の町並全体がきれいさの中につつましやみに封じこめられている。眼をすく目に入るのは白く純粋な噴水、その前に子供連れのおばさんが白さの中に生気を吸いとられたように立っている。街の北を通る人通りもまばらな国道……両側に細い並木が続く、併のな家はその間に木造二階の洋館風な支庁をばさんで、線の細いきやせやを感じて続いている。向うの丘の中腹には、深い緑の中に、病院の白い建物が浮んでいる。そのあまりにきれいでつつましく、きやせな感じが中に起っていることのあるすこさを予感させる。漁業の町網走の始めは、その幕府からこの地方一帯の経済を請負っていた請負人と呼ばれる豪商の絶対的権力の下に行かわれていた。その支配の下にアイヌの解便かくり広げられたのだ。た。道内の他の地方から深い傷と最後の希望を持って人間が集ってきた二の町。最前線に立たされた困人とアイヌ、それに続く多くの人間によって立たされた

瓜跡を持つことによって続いてきたその町は、今の二の街のたたずまりの中にどのようにつながっているのか。そこを見ようとする七何側の姿はフノと町並みの中に吹き消されてしまう。街並のきれいさからは人間臭さは感じられぬ。人間はその心の奥までもこのきれいさのそのものの中に置かれ人間の意識はそれからみだり何者も持たずにこれと同化してしまふのか。またそれは我々が認めるべき心さむののだろうか。

埠頭で話しかりてきた老人がいた。話しかけるとりうよりはその口調は、むしろ教えるような感じで、しきりに精神の修養が大事だというように事を繰り返す。話を聞いてみると戦後満州から引き揚げて最近までみやびの造りをしてきたが今は飲み屋をやっている子供に喰わせてもらっているらしい。が、今自身分は働いていながら修養を積んでいる。だからついに死ぬ時でも家の者はまた釣りか、なじと言わずにせいのねりに送りだしてくねる。想だってたんさしつねる。都会の人間は浮かれている気遣いだ。ただ一生懸命働いてる百姓存んかは何も考えないあほうだ。人間で一番大切なのは精神だ。それを私はあなたにお話している外では解りませんか、と云ってまじんだような笑い顔をこちら側に向けると。他人との具体的なかかりか中でしか成り立たない生活が二のように他人を下っつと切られていきながら続けられている。……埠頭は網走川の河口300m位に渡って

作られている。今は午後の3時ごろなのにビジネスマン風の男や、  
おぼんてんをきたおじいさん、それに子供など30人程も岸壁に  
並んでのんびりと河に釣り糸を垂れて、そしてそれをちょっとし  
た感じの親子連れがながめている。目には曇るのじか<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>と  
しか映らない景色だが、こののじかさ<sup>カ</sup>は歴史に残し、現  
在、人間の心の深淵をその町並の中に隠蔽したこの町にある心の  
よじみではないのか。

町の歴史については語る、てくれる人が今の町のこじ<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>なる<sup>カ</sup>と語る  
ものを持たなくなってしまう。皇太子が来た時建てられたという  
博物館、土器から古文書からやたらに集めてあるが説明はほとんど  
ない。産業室に並んでいた雪印のバター、チーズの箱ばかり  
が目につく。ホテルが思っようなピカピカした高校が町の中に  
そびえている。ガラス張りの熱帯植物園が観光客も訪れないよう  
な並木道の一部にホカッと建っている。そこに目指す方向を封じ  
こめられた意識の残影が感じられる。

請負人の独占は漁協のシステムに変わり漁夫も秋田などからの定  
期的出稼ぎ者によって多くを構成された経済的危機に対する安全  
弁がつくられている。漁獲高の低下を切り替へ、出稼ぎ漁民は別  
の土地へ流れて行く。漁民は昔のように街で漁具に金を使うこと  
もない。しかし、そうした近代化が進行していく中で最大の漁獲  
期である秋には収益をめぐってドスを使った殺人が毎年11年ほあ

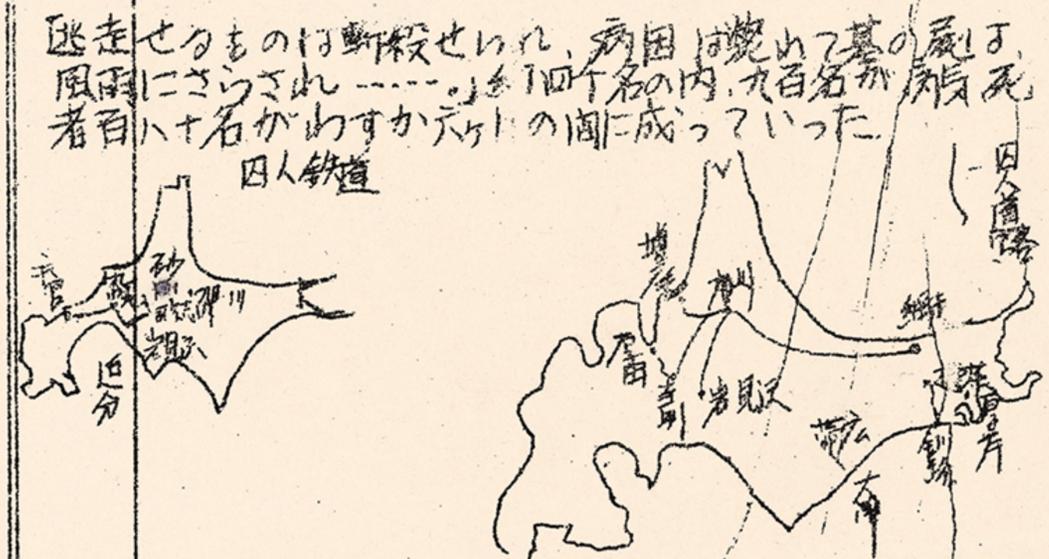
るという。人間の心のすきびは、じのまうな出口もなく町並のき  
れいさの中で陰湿さを加えてゆく。

網走の町では腕力のあるやつよりも、スマートな頭の良いやつが  
子供のボスになる。海岸の砂浜で5、6人の子供が砂の上にリン  
グの四角を書いてレスリングをやっで遊んでいたが鼻をたらし  
たようなものを混ざった中で足の長いすら、としたのが皆を仕切っ  
ているようだった。俺いから反則をやっ、ちゃダメだぞ、お前たち  
はレスリングのルールを知らないんだから俺のいうことを良く聞  
けよ、他のやつは足がけがをするとか何だかんだいいながら、そ  
れに従って一生懸命組み合ひをやっている。そのスマートさ、  
そのルールが網走の町を封じ込めている。丁度の中には、きり  
きさまれで行った<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>今<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>きれい<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>町<sup>カ</sup>並<sup>カ</sup>みに<sup>カ</sup>その<sup>カ</sup>姿<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>かく<sup>カ</sup>  
している。そして出口を封じられ、屈折していく人間の傷はま  
すその中に飲み込まれて行ってしまう。

# 北海道年表

- 1457 アイヌ民族の反乱……コシヤマインの乱
- 1542 場所持ちの圧迫に耐えかねて、瀬棚を中心にするエゾが叛乱
- 1609 ショクシャインの乱は、日高、静内、石狩と広い地域におこりアイヌ民族自決の最後の戦いで有り、その後は見るも無残なシャモの服従をしいられた。  
江戸幕府、松前藩が置かれる。  
幕府のオ一回屯田兵
- 1868 明治 榎本武揚らが蝦夷全土を手中にする。
- 明治 五稜郭戦争により明治政府の南拓使が置かれる。  
アイヌの和人同化の基本方針が明治政府よりである。
- 明治3 榎本武揚、幌内で燃える石を発見  
本願寺の坊主がアイヌの労働力を中心にして函館-札幌間の道路を建設、「かけた石百十三、各向に板敷をしたのが17カ所、工事にかけた期間は正月数ヶ月」というたいへんな短い期間であった。この頃から中央政府が変るに道長官も変っていった。
- 明治5 明治政府徴兵令
- 明治8 明治政府、オ一回屯田兵ハケン。幕府側について奥羽三県が琴似へ208日入植、約千人。  
ロシアと千島樺太交換条約を行なう。  
アイヌを旧土人と称する。
- 明治10 西南戦争に屯田兵が出兵。日頃の不満をぶつけ、最高の働きをするが、恩賞がまったく無く、怒って割腹する兵士もでた。  
この頃、岩村南拓使長は「移住は貧民を生えず、富民を植えん。極言すれば人民の移住を求めずして、資本の移住を求めんと欲す。」
- 明治12 幌内炭山開採

- 明治13 十勝地方一帯が付工の被害。
- 15 南拓使を廃し、函館、札幌、根室に三県を置く。
- 19 三県一府制を廃止、北海道庁を設立する。官営工場を私営にする。(サッポロビール等)  
この頃から囚人をおくりこみ、用務、土木工事、墾拓を行つたが、その労力は残骸をきわめし木をたおすために囚人をむりやり木の上において、その墾拓で倒れる事多し。現在でも鉄道トンネルをほりおこすに白骨が出てくるほどである。  
太政官大書記官、金子運太郎の言。  
今日の如く重罪犯人の多くして、いたすらに国庫支出のかんごく費、増加するの弊、これは囚徒をして、これらに事な仕事に服役せしめ、もしもこれに耐えずして死して、その人員を減らすのはかんごく費支出の困難を告ぐる今日において方やむをえざる政略なり。金子の命令書により約1000名以上の囚人は各地の南拓から採鉱、土木工事へと転用されて、こきつかわれて行った。



- 明治24 函館に徴兵令施行。日本海軍はロシアの奥手を自衛するためにサッポロが大警備。
- 25 屯田兵、各角屯駐。平民屯田兵を召集し初める。
- 26 夕張炭鉱で抗夫三百名が暴動。作人連も、行李も何ひとつない。ひどいのは茶碗も一つも持たず、湯釜とサッポロの供が、代る代る、それで飯を喰った。

7 日清戦争

毛田兵に勅命、臨時オ7師を編成(400人)  
日本帝国主義はこれより侵略の道をたどる  
全道に暴風雨248人死亡、救援者無  
北海道全道に徴兵令  
戦争景気の後、インフレとなり庶民は生活におわれ  
日50銭という低年金だった。  
最後の毛田兵を召募、しかし毛田兵の定着率26%とい  
う低率だったし、不逞地主がひどいように多かった。

日露戦争

戦争による増税の苦しさは庶民の上に大きいのしかか  
った夕張炭山、スト決行 約80名。  
南助松、永田金蔵の活躍、後に足尾銅山争議を指揮。  
内炭山暴動、足尾鉦のストライキ、暴動と続いたあ  
と賃金値上げと労働条件の要求。  
賃金値上げの要求には断然応ずる事無き...又、借金外  
の要求は...責任を帯びて確かにやるという事は答えか  
おる。」という答えに「鉦長殺せ」と絶叫した120名  
の鉦夫は社宅、監視小屋をダイナマイトで破壊した。  
坑夫3人が切り殺された。  
夕張、幾春別、幌内、歌志内、小樽港の脱走者など  
等々でストライキが繰り出。

日本製鋼創立(室蘭)  
王子製紙創立(苫小牧)  
幸徳秋水事件おこる

明治末期には、炭鉦でガス爆発や、小樽 函館  
などの大火と大災 があいついでおこっている。

夕張で2度のガス爆発、約500名が死亡  
全道に大凶作 10万石から3万石にとどまり、草の根  
や木の皮を食えざるに生活が続く。  
憲政擁護全国民大会、新成信大会が開催され東  
京では2月10日に会場で暴動が起きた年で、  
大正デモクラシーの時代へと移っていく。

オ17世界大戦(1914) (日本中好景気であったが一部)  
炭鉦が財閥の系列下 分の土のてしかはかた。  
には「こり」といわれる。

輸出額大正元年の時より10倍にふくれあがる。  
大戦中、景気の波に乗った成金がでる。リンゴ成金、  
成金。

大正6

日本製鉦ストライキ、兵器づくりを放棄

7 申道50年祭か全道の米騒動をよそに、はなやかに南へ。

8 第一次の大戦後不景気は諸物価の高騰を背景として、石炭  
積込み人夫(室蘭) 日本電気工業 3000人(苫小牧) 糖業人夫  
(小樽) 函館ドックの職工150人等いたるところで労働争  
議。

9 神楽村の小作争議  
夕張、歌志内等でガス爆発500人死亡  
小作争議 雨龍村、中津須賀農場で小作人、農場側の  
一方的な納税に不満が爆発→昭和手で6回  
昭和初期時代→全道炭鉦、小樽の豆腐工場などで4万1千人  
が失業。

10 日本製鉦は一年に4000人の首きり  
函館と苫小牧で大火、両方で2100戸を焼失

凶作  
11 有島武郎は農地解放宣言→小作人は私利私欲には入り  
失敗、12年有島武郎は波多野秋ると心中。  
共産党成立

12 関東大震災  
14 小樽高商事件→軍教反対運動

15 農業恐慌  
旭川、系屋銀行が倒産  
全道で最初のクーデター —— スローガン (首きり反対  
労働者保護法)

昭和

2 金融恐慌、昭和ひとけた不況時代に突入  
小樽港労働者——ストライキ 小林多喜二  
労働者の不利は妥協でおわる

3 共産党の一斉撲滅、小樽、函館で700名。

4 凶作で労働争議、小作争議が続発

5 世界大恐慌

6 全道的大恐慌  
昭和5年 301万3000石  
6年 144万9000石

飢饉地獄の有様 南瓜はまて良の万と澱粉米等を主食と  
して食えざるにいたる

道庁側官は口でいって、いっけの南きにはなした。  
昭和5年までの凶作まで身売りは3100人に達する

昭和5年には失業2千人に達する  
小作争議が156件も起る

日本帝國陸軍、奉天郊外柳条溝で炭鉦が爆発、ヨーロッパ全  
國に波及した15年戦争。世相的には、ロケロナンセンスが流行

昭和17 また凶作(前年に軒をかけた)の凶作と重なった)  
 オリンピック3段とびの南部選手が金メダル  
 昭和6、7年にわたり米よこせ運動が全国的に広が  
 った。

8	小林多喜二殺される	米産(石)思想検挙
	全国的にデフレ (1枚数)	昭和5 300人
	恐慌 昭和3年-100	6 144 173人
	凶作 5年 68	7 76 185人
		8
		9
		昭和10

9 満州で戦争が拡大し 日本製鋼などが日鋼に参加、戦争  
 遂行に大きな役割

10 道内の警察 改正  
 専制国家への生かため

11 道内大演習会(天皇)くる

満州へ南は拓義勇軍を派遣、前拓義少年義勇軍222 出陣  
 その後北海道は戦争への協力体制に突入する  
 戦中は本土決戦へ本可欠食料戦士として直接戦力に入れ  
 られる戦後と通じ、食料 戦時と国土再建の担手に望む。戦  
 災者北海道に送り込 だ→昭和10田兵  
 しかしその形態は悲 運きわめ 着のみまのまなり。かけ  
 た人間は、建っているはずの家もなく、土はあっても、よた  
 た原野であり激しい寒波の中で農作していた人間がいく  
 らいたのだろうか。

戦時戦争の経済成長の中で北海道は何年計画を決定  
 するのか。土地気候のため赤字覚悟でやらなければ  
 ならない。

31 大凶作 脱落者、離農者、困窮者が拓民の中からはる  
 農産物の集産地には身売防止相談所が設けられた

39 1964年(昭和39)から3年向うまでも農民は冷害をうける  
 加えて、海外農産輸入の影響をうけて窮迫する。  
 25万戸→18万戸  
 ・昭和36年代には炭鉱落盤事故があいつぎ 200名  
 位の単位で死んでゆく。

昭和43 北海道百年祭、100万人以上集めた。道内各地からバスを運  
 らねてやってくる。

「風雪百年、輝く未来」

44 歌志内では12人落盤事故で死亡

47 サッポロで冬季オリンピック開催予定



## カンパの呼びかけ

'69の中で我々の集田的課題としての北海道  
 101の行動が現実の側にはっきりとしたものを定着さ  
 せる事を目指し、'68広島デーから'69101の写真の  
 課題、この行動によって連盟活動を全国的にまきお  
 こす。また北海道に文化の芽をおこすことをはっきりとやり  
 きらねはならない。

この101の行動は撮影に参加する人間にとってミ  
 けの課題ではなく、生この人間にとっての課題として我  
 々の中に持たねはならない。この事をやりきるためには  
 撮影から出版に至る迄、はっきりと一人一人が荷なゆなけ  
 れはならない。この事をやりきるためには莫大な金を  
 必要とする。これを金という外在的なことでとまらせることは  
 できない。

一人一人がこの活動を支援し、**カンパ**を要請します。

北海道101集田撮影